

令和8年度 上田市立清明小学校 自己評価シート					前期のまとめ								
学校教育目標			めざす子どもの姿(中期的目標)		総合評価								
「清く明るく 豊かな心で 進んで学ぶ 子どもの育成」					豊かな心かかわりや さまざまな体験を通して 自分で気づき よく考えて 自ら行動できる子ども								
					今年度の重点目標		成果と課題		A	B	C	D	改善策・向上策
					1	○五感を刺激する本物に触れたり、心が動くような体験をしったりする学習から、子どもたちが問いを生み出し、対話を通して互いの考えをつなぎ、練り上げ、更新していく授業を仕組んだか。【学びを拓く】	生活科等における野菜作りや生き物の飼育・観察、地域探検、高原学習など、本物に触れることで児童の心が動き、「なぜ?」「もっと知りたい」という主体的な問いが生まれる場面が多く見られた。児童のつぶやきを学習問題につなげられた場面もあったが、児童自らが問いを生み出し、対話を通して考えを更新し続ける授業の構想についてはさらなる検討が必要。			○			「問い」を誘発する仕掛け：毎時間の実施は難しくとも、教科や単元を絞って「子ども自身に問いを立てさせる活動」を意図的に取り入れたい。
		2	○日常のあらゆる場面で、あいさつを大事にした指導ができたか。また、自身が示範となるあいさつができたか。 ○相手を慮って聴いたり行動したりする子どもの姿を逃さず、その場で「よさを見出し、言葉にして伝える」ことができたか。【他者意識の育成】	相手の目を見て聴く姿や、友達への共感のつぶやきを、教師がその場で価値づけて全体共有することで、聴き方や受け止め方に良好な変化が見られた。朝の会などの決まった場面ではできるが、「状況に応じたあいさつ」や「自発的なあいさつ」が不足しており、一部で形式的(言えばよい)になっている状況があるのではないか。			○			意識づけ：「なぜ挨拶が大切か」を再度考え直す機会を設けるとともに、ドアへの挨拶掲示(視覚化)や「あいさつの達人」などのイベントを通じ、児童が楽しみながら意識できる環境を作る。			
		対象	評価項目	評価の観点			A	B	C	D	改善策・向上策		
重点目標	自主の校風	学び 【心の道】	【学びを拓く】 ・見て、触れて、感じる体験 ・問いを見だし、自らの考えを持つ ・考えを伝え、つなぎ、深める	○五感を刺激する本物に触れたり、心が動く体験をしったりする場面を、学習のプロセスの中に位置づけることができたか。 ○「問い」を生み出し、対話を通して考えを練り上げ、更新していく道のりを支援できたか。 ○互いの考えをつなぎ、集団で学びを深めていく対話の場を、授業や活動で具現化できたか。		上記「今年度の重点」1にて評価						上記「今年度の重点」1にて評価	
			【学びの定着】 ・「わかった!」「できた!」を積み重ねる学び ・自身の学びを深め、高める振り返り ・学ぶ習慣を身に付け、学ぶ楽しさを感じる家庭学習	○一人ひとりが「わかった!」「できた!」を実感できるよう、子どものつまずきを捉え、適切な助言や支援ができたか。 ○子どもが自分の学びを客観的にふり返り、自分の成長や課題に気づいて、次の目標をもてるような時間を設定できたか。 ○「家庭学習の手引き」を有効に活用し、家庭と連携して 子どもが自ら学びを組み立てられるよう支援できたか。		少人数指導やMIMアセスメントの活用、課題のスモールステップ化により、「わかった」「できた」という成功体験を積み重ね、自己肯定感を高める指導を工夫した。 授業時数の削減や内容の消化に追われ、「振り返り」の時間を十分に確保できず、単なる「感想」で終わらせてしまうことがある。「振り返り」の具体から児童の願いや問いをつかんでいきたい。自主学習が単なる「漢字・計算の繰り返し」や「ノルマ(やるだけ)」に偏っており、自ら学びを組み立てる楽しさを実感させる支援に工夫が必要。		○				振り返りの視点を明確にする：記述の観点を「理由」「次に頑張りたいこと」等に絞り、以前の自分との成長を比較したり、仲間との学びの成果や次の学習への願いや問いを位置づけたりと質を高める。	
			【他者意識の育成】 ・気持ちが伝わるあいさつ 「いつでも」「どこでも」「だれにでも」 ・相手を慮る心	○「いつでも」「どこでも」「なんどでも」の挨拶が、人間関係づくりの土台となるよう日常的に指導できたか。また、自身が示範となるあいさつができたか。 ○相手を慮って聴いたり行動したりする子どもの姿を逃さず、その場で「よさを見出し、言葉にして伝える」ことができたか。		上記「今年度の重点」2にて評価						上記「今年度の重点」2にて評価	
			【主体的・協働的な活動の充実】 ・子ども同士のつながりを強くする、子ども主体の活動 ・集団としての合意形成 ・互恵性のある交流活動(異年齢・地域の方 など)	○子どもが自分たちで工夫し、協力して進められる活動の場を意図的に設定することができたか。 ○意見がわかれたときも、話し合いを通して子どもたちが互いに「折り合い」をつけられるよう支援できたか。 ○地域や異年齢との交流において、子どもが自分の役割を実感し、自尊感情をもてるような活動の場を工夫して設定することができたか。		「会社活動」や「児童会活動」において、否定しないことを前提にした話し合いや、自分たちで企画・運営を楽しむ姿が見られ、集団としてのつながりが強まってきた。CSルームの活用、「上田わっしょい」の踊りや大豆栽培・味噌造り等における地域の方による指導・交流、ベア学級での読み聞かせ、1年生を迎える会のお礼のお手紙など、相手を慮って行動する具体的な場が設定された。 意見が対立した際、自分たちだけで納得できる結論を導き出す力がまだ十分ではなく、解決が人任せになってしまう実態がある。		○				児童同士の話し合いでトラブルが生じた場面で、自分の気持ちの整理や表現、相手の気持ちの受け止めなど、互いに折り合えるまでの試行錯誤するプロセスを大切に、自分たちで解決する力を養いたい。神樹の時間や生活科、他教科や学級活動などで地域の方との交流場面を具体的に計画し、関わり合いながら学ぶ喜びを実感できる場を増やしていく。	